

大崎市流地域自治による地域づくりが始まって10年が経ちました。これまでに行われてきた、地域や地区の特性を生かした個性あふれる地域づくりを紹介します。

1 古川地域 長岡地区地域づくり協議会

持続可能な地域づくりを目指し組織を再編

長岡地区地域づくり協議会では、花いっぱい運動や防災訓練のほか、生涯学習の発表の場となる「小学校・地区民合同作品展」、長岡小学校のプールで行う「魚のつかみどり大会」、秋の風物詩「羽黒山彼岸花の里まつり」など、老若男女が楽しめる事業を行い、地区内外に発信しています。

昭和50年に前身の長岡地区振興協議会がスタートし、大崎市となってからは、暮らしをめぐる課題解決を目的に大崎市流地域自治組織として活動を行ってききましたが、地区の人口減少や少子高齢化により、役員の重複や担い手不足といった課題を抱えていました。

この長年の課題を解決するため、住民参加の話し合いが重ねられ、平成23年4月、組織の見直しが行われました。

それまでは、各々の専門分野を担う、各種団体により構成される組織形態で、活動や会計もそれぞれの団体に任せられていたため、団体間の連携が図られにくい状態でした。

組織再編では、新たに、総務、イベント、生活環境、生涯学習、安全安心、福祉の6つの委員会を設け、関連する団体が各委員会に所属するように割り振りました。これによって、役割分担が明確化され、同一の組織として、他の分野の課題も共有できるようになり、横の連携が図りやすくなりました。

同時に、規約を改め、会計も一本化して、効率的に事務・事業が行える体制を構築。名称も心機一転、長岡地区地域づくり協議会に改めて、地方創生に向けた実践に積極的に取り組んでいます。会長の神名川晋太郎さんは、「組織が見直されたからといって、すべてが一朝一夕にうまくいくものではないが、これからも改善を重ねながら、地区のみんなの力で、息の長い地域づくりを進めていきたい」と話してくれました。

平成24年から、同会が指定管理を行う長岡地区公民館では、「地域の合併から人の合併へ」をテーマに、岩出山、川渡、田尻地区公民館との連携事業を行うなど、地域の枠にとらわれない市民の一体感の醸成やネットワークの構築など、新しい公民館事業のあり方を模索しています。



長岡小学校のプールを利用して開催される魚のつかみどり大会は、地区の子どもたちが毎年楽しみにしています



今や長岡地区だけでなく、市内外に広く知られるようになった羽黒山の彼岸花。毎年9月、彼岸花で山が真っ赤に染まるころ、まつりが開催されます



長岡、岩出山、川渡、田尻の各地区公民館利用者が一堂に会し開催された「4地域合同七夕交流会」。地域の垣根を越えた新しい交流の輪が広がりました。



特定非営利活動法人
蕪栗ぬまっこくらぶ事務局長
高橋 のぞみ さん

活動の概要

平成8年に前身となる「蕪栗沼探検隊実行委員会」が組織され、平成12年、特定非営利活動法人「蕪栗ぬまっこくらぶ」がスタート。「環境保全」「環境教育」「農業との共生」を柱に、行政や地域住民との協働を進め、蕪栗沼の豊かな自然環境を未来に伝える活動を展開中。

人と自然が共生できる社会を目指して

～蕪栗ぬまっこくらぶの10年～

平成12年の法人設立当初は、地元の人でも蕪栗沼を知らない人がたくさんいたと聞いています。蕪栗沼がラムサール条約湿地に登録されたことや、わたしたちの行う環境保全活動や環境教育を通じて、蕪栗沼の自然や生き物と触れ合うことで、今では多くの人に蕪栗沼を知ってもらえるようになりました。現在約120人ものサポーターに支えられて蕪栗沼の保全活動などを行っています。

わたしは蕪栗ぬまっこくらぶで働いて7年になりますが、小学生の時に戸島潤さん（現在、蕪栗ぬまっこくらぶ副理事長）の環境教育を受けたのがきっかけで、生き物や自然に興味を持ち、好きになりました。

生き物出前講座などの環境教育は、子どもたちが楽しみながら自然や生き物と触れ合うことができ、環境保全の重要

性を認識してもらおう場となります。多くの子どもたちがさまざまな形で環境保全に関わる人材に育ってほしいと思います。次世代に繋がるように、より一層、力を入れて人と自然が共生できる社会に向けた取り組みを進めていきたいです。

現在の活動を維持しつつ、更なるステップアップを目指し、新たな10年に向けて邁進していきたいです。



▲冬の寒さもなんのその。真剣に渡り鳥の生態を観察する子どもたち



特定非営利活動法人
鳴子の米プロジェクト理事長
上野 健夫 さん

活動の概要

平成18年、鳴子温泉地域の農業を地域で支える「鳴子の米プロジェクト」がスタート。中山間地に適した米を求め、プロジェクト独自に試験栽培を行い「ゆきむすび」が誕生した。農業が持続できる価格で消費者が米を購入し、米作りを支える仕組みを構築。農家と消費者との信頼関係を大切に活動中。

中山間地の農と暮らしを守るために

～鳴子の米プロジェクトの10年～

鳴子温泉地域は、傾斜地が多く冷涼な気候なため、米作りをするには大変な地域です。しかも米価の下落や生産者の高齢化もあり、米作りをあきらめる農家もいます。このままでは鳴子温泉地域の米作りが衰退する危機感がありました。農地を守り地域活性化を進めるため、平成18年に地元の仲間たちと「鳴子の米プロジェクト」を始めました。

冷涼な気候に合う米「ゆきむすび」を、農薬や肥料を通常の半分に減らして栽培し、稲刈り後はそのほとんどをくい掛けして天日干しにします。手間はかかりますが、作り手の精一杯の気持ちを込めて収穫しています。現在は24人の生産者が合計約17haの農地にゆきむすびを栽培しています。

農家の米作りを支えるために、事前に予約購入してくれる「支え手」は全国

に約950人もいます。米の購入だけでなく、田植えや稲刈りの時期には、県外からも農作業に参加し、鳴子温泉を楽しんで帰ってくれることがうれしいです。

このプロジェクトを始めてから、農家の米作りに対する意欲が高まっただけでなく、新たに米作りに参加する人が増え、地域が元気になりました。担い手不足や生産者の高齢化の問題はありますが、地域の若者や60歳で退職した人たちにも、地域の農業の発展に向けてがんばってもらいたいです。



▲予約購入者とともに収穫は、年に一度の喜びのときです